
要するに、世界は

水城 麻玖羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

要するに、世界は

【Nコード】

N 7 1 5 6 W

【作者名】

水城 麻玖羅

【あらすじ】

気付いたらコナンの世界に転生していた椎名 愛遊「シイナ アユ」
そんなアユは
蘭の事が大嫌い
なら虐めちゃう？

暇潰しに始めた蘭への虐め

「直ぐ壊れないでね？」

おもちゃが壊れて良いのは
アユが飽きたときだから
徹底的に遊んであげるよ」

最後に勝つのは

虐めっ子のアユか

それとも

嵌められ虐められている蘭か

・キャラ嫌われの話です

・オリキャラ出てきます

・とにかく蘭が虐められます

・新蘭？そんなのナイナイ

・とにかく蘭が虐められる

・暴力表現あります

- ・転生トリップです

- ・新一はコナンになりません

- ・オリジナルと捏造激しいです

虐めが嫌いな人・蘭が好きな人は見ないで下さい

この話は

私が出分のホームペで書いている作品の別視点から書いた物です

なので見たことがあるかも知れませんが
パクリとかではありません

皮肉なので御座います

こんにちは

私は

椎名 愛遊「シイナ アユ」
といいます

気軽にアユとも呼んでください
帝丹高校二年B組の
女子高生です

私は

前世…とでも言っておきましょうか……

その記憶があるのです

その記憶が戻ったのは

三歳位の時に
フツと

頭に沢山の情報が流れこんで来て
私は前の自分の事を思い出したのです

前の私は何処にでも居る
平々凡々な女子高生でした

将来は何してんのかな
とか考えている

普通の何処にでもいる女の子でした

そんな前の私が死んだのは
雨の日の事です

傘を差しながら
ぼんやり道路を見ていると青になったので
渡ろう
と一步を踏み出したとき

大きな音がして体が宙に浮き
浮遊感気持ち悪！

と考えていると
聴て

何かに引つ張られるみたいに地面にたたき付けられて
意識が壊れたビデオの様に途切れ真っ暗になりました

そこまでの前世の記憶が鮮明に思い出し

ああ

自分は一回死んだんだなあ
と理解しました

何故

前の記憶が在るのかはわかりませんが

今の世界は
名探偵コナンの世界の様です

が

パラレルワールドみたいな世界みたいですね

新一君はコナンになってないんですから

まあそんな世界でも

生きて行こうと思います

ある人間が（前書き）

主人公の愚痴です
新蘭入っています
主人公腹黒いです

こんな駄文ですが
見てください

ある人間が

ああイライラする

「新一おはよう!」

「蘭おはよ」

なんですか？

二人の赤くなっている顔は

肌寒いはずなんですが…

ああ気持ち悪い

鳥肌がたっているのはアユの所為ではありません

「何あれ？つぎ」

「キモくね？毛利」

「正直うざーい、ねー」

「ねー、ホント」

女子の絶対零度の視線で教室が凍りついてるんですよ
南極ですか？ここは
ペンギンさんいらっしやいませんか？

…いませんね 当たり前だ

「ヒュー！朝からお二人方ラブラブなご様子で？」

「っ！もう園子！！からかわないで！！」

またまたKYが来ましたよ
ホント何なんですかこの三人は

この空気に気付かないなんてどれだけ馬鹿なのですか

ああ…馬鹿でしたね

本当にイライラしますね

壊したくなります

いや

もう壊しちゃいましょう

どうせ暇ですから

おもちゃ？

もちろん毛利蘭ですよ

どれだけ遊んだら壊れますかね

楽しみです

.

世界は皮肉だ

「きゃあ!!!」

美術の時間なう

手始めに脚を引っかけてみましたら
派手に転びましたね

しかも私が脚を引っかけた
と気付いてはいません

馬鹿でしょうか？
いいえ阿呆です

丁度転んだ先には完成したばかりの風景画があり

思い切り汚ね〜絵の具の混じった水をぶちまけたよ
綺麗な絵が台なしになってしまいましたね〜

「あ……ミキの描いた絵が…酷い」

「う……うめ」

絵は仲が良い四人グループの一人

ミキが描いた絵です

こんな風にされて

後の三人が黙っているはず無い訳が無いですよ

「ちょっと……!!」

毛利？何してくれるの？

ミキっちの一生懸命描いた絵が台無しじゃん!!」

「そうよ……!!毛利さんサッテーヒナの親友虐めるなんてヒナ許さないし

ミキちゃん気にしないで？

まだ直せそう？」

二人のギャルっぽい女の子達のヒナとアヤメが怒り気味に怒鳴って
きましたよ

ミキが大好きですからこの二人は

「うっん……殆ど水がかかって滲んでるから描き直すね……」

ミキという子は涙を目に溜めながら
新しい画用紙を取りに行った

あゝあゝ

酷いものですね

周りから見たら

せつかく書いた絵を台無しにしてしまったんですから

周りの目が冷たくなってきましたよ

だけど蘭は気付いてはいませんね

どれだけ鈍感なんですか

そんなところが大っ嫌いです

「ミキ……一生懸命描いてたのに……ねえ毛利
もしかして転んだの態と？」

何時もミキ、ヒナ、アヤメと一緒にいる親友のハルも声を抑えてい

るが怒りが滲み出ています

かなり怖いですよ

彼女には逆らいたくありません

普段はクーデレキャラなはずなのですが

「酷ー

毛利ってそんな子だったんだ

そんなこと無いってウチもヒナっちも信じてたのに
マジ幻滅」

「ねーヒナもアヤメちゃんに同感」

「違う！……態とじゃないわ……！」

「どーだか」

蘭は泣きそうにしながら否定していますがね〜
軽くキモいです

ハル、ヒナ、アヤメは親友を傷付けられた怒りで
許す気にはなれないみたいですよ

「ねえハル、ヒナ、アヤメ
ミキ大丈夫だから

また絵描くからいいよ
毛利さんも転んであなっちゃったんだから
あそこに置いとくミキも悪いし」

「ミキちゃん……優しすぎ
惚れそう」

ヒナはミキの小さい体をギュっつと音がするくらい抱きしめたので
苦しうだが嬉しうに「苦しいよ」と言えば小さな体からヒナが
慌てて離れた

ミキさん…マジ天使ですか？
可愛すぎます

「ミキ、いいの？」

「うん」

「先生ーミキっち絵を提出するの遅れるかもしれないけどいいですかー？誰かさんの所為で」

「……ええ」

先生も顔を顰めてますね

そりゃそーですか

だって「優等生」の蘭が態とらしく絵を台無しにしてしまったのですから

あ、チャイムがなりました
多分休み時間には始まりますね

楽しみです

ミキ 髪型ボブで小動物系

一人称ミキ

ヒナ 金髪天パで二つ結い

ちょいギャル系

名前のあとにはゝちん

一人称ヒナ

アヤメ

茶髪で外人顔の大人系

ギャルは入っている

名前のあとにはゝっち

一人称ウチ

ハル

黒髪ロングの綺麗系

四人の中ではお姉ちゃん

一人称私

と言った

「最低ねアンタ」

「人の絵台無しにするとか……
有り得ないから」

「調子乗ってて
正直ウザったいんだよね」

「工藤君の幼なじみだっけ？
高が幼なじみの癖に工藤君と馴れ馴れしいんだよ」

はい
こんにちは

私椎名愛遊は今
今体育館裏で行われているイジメシーンを影から見えています
勿論当事者は毛利蘭ですが

うちのクラスの女子五人くらいが虐めてますねー

蘭は何も言わずただただ俯いて黙って居ますねー
軽くウザったいですよーっと

私は新商品の○ツキーを片手に見学中です

「何とか言えば？」

例えば「私を傷付けたら新一は黙って無いわよ！」「とか？」

「あはっ！！超ウケる
てかキモい」

「てゆーか

工藤君も可哀相だよな

こんな奴が幼なじみなんて」

「あーそくだよね

しかも親友の園子ちゃんは尻軽って有名だし」

「えー

とゆーことは

誰にでも股開く女と親友な子が
工藤君の幼なじみってわけね
工藤君のお株はただ下がり」

「わぁお 可哀相だなw」

「じゃーね
幼なじみさん」

と言った後笑いながら五人は居なくなりました

「あのさ」

園子ちゃんてやっぱり尻軽だよね」

「っ！…見て…たの？」

私は影から出て来て一言

だってっそっちの方が
面白そうじゃないですか」

「当たり前じゃーん
アユはっ園子ちゃんに

いっぱいいい男の子達紹介してあげようかな？

あは

アユってば優し

パン

と凄い音が響き

左側の頬には凄い激痛

殴られましたよ

「私の事はいい……だけど園子のことを馬鹿にするのは許さないから!!!」

馬鹿かこの女

本気で思いましたよ

友達の為？どれだけ自己犠牲心豊富なんでしょうか

いまが自分の首を締める事になるなんて

思ってもいないでしょうね

私はニヤツと笑みを浮かべたら
怯えた顔をされました。

失礼ですね但笑っただけなのに、
あ、言っておきますが私はMではありません

IM5（今から泣き出す五秒前）
それでは
せゝのっはい！

「……わあああああん！！！！！！！！
うわあああ——！！！！！！！！」

「おい！！！！
そこで何をしている！！！！」

わあ、先生ナイスタイミング、
声が聞こえたんですね。

よかつたよかつた

「先生……ヒック……急っ……ヒック……に……毛利さんが……ヒック
「邪魔なんだけど調子乗るな」
……ってアユの……頬を……叩いて……きたんです……」

先生は驚いた様な顔をして蘭を見た後
アユを見て顔を顰めて

「毛利、後で職員室に来なさい」
普通ここで

工藤新一君が出てくるところですが出てきません

あれ？なんで工藤君が出てこないかって？
丁度今日は工藤君休みなんですよ
こんなに丁度良く来ることはありませんよ……と

漫画じゃあるまいし

「あははゝ 馬鹿だねゝ
まあ別にいいけどゝ
停学ゝ？

させないよゝ
だってこれからアユ達をもっともつと苦しませてあげるんだからゝ

折角の玩具はゆっくり壊したげるよ」

「どういふ…こと」

「自分で考えなよ」

そう言っアユは

赤くなつた頬のまま泣きながら走って行きました
何故かつて？

このことを広める為ですよ

段々面白くなってきました

だけど

停学？させないよ

だってこれからアユ達がもっともつと苦しませてあげるんだから
折角の玩具はゆっくり壊したげるよ

どういうこと？

蘭は昨日の言葉が頭から離れず雨の降る音と共に響いている

不安が混じったもやもやした気持ちのままだが
頭を切替え学校に向かった

「おはよー」

ガラガラと戸を開け挨拶をして返って来たのは

トイレにあるバケツの水

「……………え？」

ポタポタと水が垂れる音がやけに大きく聞こえる

「最低だね毛利さん
そんな子だったなんて幻滅したよ」

「俺達毛利さんに憧れてたのに」

「サITTER」

「酷いよ毛利さん
なんであんなことしたの？」

クラスのいろいろな人が口々に話す

「……………え？」

蘭は何の話をしているかわからないという顔をしている

馬鹿だねーそんな阿呆な顔しても

周りの目が白いのは変わらないしー

「信じらんない!!!」

わかんないの？

なんでこんな目に会ってるか？」

「アユちゃんを虐めてたのに？
自覚無いの？

頭おかしいんじゃない？」

「っ!？」

私は虐めてなんか……」

「うるさい、最低

アユを虐めるのに飽きて

うちのミキも虐めようとした訳？」

ハルはミキの前に守るようにいて
睨みながら冷たい声で淡々と話している

カッコイイな〜ハルは
超カッコイイよ〜
よくそこまでズバズバいえるな

「違う!!」

「違う違う違う
アユっち虐めてるのばれて虐められるの怖くなった訳？
最低、人間失格」

アヤメはケラケラ笑いながら蘭の肩を押したら
蘭は倒れてしまった

空手やってるのに
そんなのも避けられないんですか

「アヤメちゃん
人間失格って太〇治の小説だよね？」

ヒナその話好きだよ」

「それじゃないから」

アヤメとヒナも蘭を見る目が一層冷たくなっている

「あ……………あた……………し……………して……………な……………」

蘭は恐怖で言葉が上手く出ない

あはゝ

良い気味だ

「おはよー！！」

ギリギリセーフだね！

蘭おは……………蘭！？」

園子は慌てて蘭の元に駆け寄る

「ちょっと！？

なんで蘭がこんなにびしょ濡れなの！？」

「ああ！！大丈夫だから！
傘飛ばされちゃって濡れちゃっただけだから」

園子に心配かけたくない

蘭は引き攣った笑顔で返すが

園子は気付いたらしく

新一の席を見るが誰も座っていない

今日も工藤君は休みみたいですな

「わかった…」

馬鹿だねー傘飛ばされるなんて
ほらジャージとタオル」

「ありがとう

着替えて来るね」

この世界の

ザワザワと何時も道理騒がしいクラスに

ガラガラと戸を開ける音がした瞬間に静かになって
音源を白い目で見る

その先には毛利蘭

「蘭！おはよう」

「おはよう園子」

園子は周りを気にすること無く話しかける
が

周りの空気は変わる事はない

その時またガラガラと戸が開く音がした

「はーっす」

「おはよう工藤！！！」

「随分休んでいたな！サボりか？」

「違げーよ！」

久々に登校してきた工藤新一は
幼なじみの蘭に挨拶をしようとした

「蘭おは……」

「工藤君オハヨー！！！！風邪？大丈夫？」

「オハヨー工藤君
随分長々しかった休みだったね」

「おっはー工藤君」

「あ…ああ」

「工藤君、休んでる間ノート取って無いでしょ？
はい、休み分まとめておいたよ」

「ミキちゃん優しい」

何処かの誰かさんと違って」

いろいろな子が一気に話しかけてきた所為で
蘭に話す事があったのに
話せなかった

いやクラスの皆が話させなかったのかもしれない

まあ放課後にでも話そうと思った
が

もしもこの時無理にでも話をすればあんな事にならなかったのかも
しれないのに

イイコト考えた〜

アユは

薄笑いを浮かべながら
新一と蘭を交互に見た

.

人間は

新一は直ぐ気付いた

蘭がクラスに虐められていることに

自分が風邪を拗らせて休んでいた時に何があったんだろうか

クラスの奴に聞いても言葉を濁らすばかり

新一は蘭の事が好きである

昔からずっと蘭を想い続けていて

今日にでも告白しようと思って来たら

なんで蘭が嫌われてんだ？

嫌われる要素なんて蘭には無いはずなのに

わからない

「工藤君」

確実に工藤は蘭のことが好きだから利用出来そうだな

「…なんだ？」

「知りたい事があるんでしょ
アユ」教えてあげるよ
知りたかったら
放課後教室で残ってて」

返事も聞かないでアユは歩いていったよ
だって面倒だし

.

所詮

放課後になり

アユは教室で待機中

ですが

教卓にだれか隠れてるみたいです

ま

面白そうなのでほっとこうか

こんなに上手くいくとは

思ってたけど

やっぱり

この世界の人間も一緒だな

クラスが蘭を虐めているのは
自分の意思

切っ掛けを作ったのはアユ

この世界の人間は
自分や周りとは違う人間を
二つに分ける癖がある

尊敬し、
親しみを持たせる人間
と

敬遠し、
罵倒する気持ちを持たせる人間

の二つに分ける癖

アユと蘭は似ている

しかし

アユは前者
蘭は後者

に分けられた為

アユの作成するシナリオが
ここまで上手くいった

もし反対だったら
アユが虐められていたな

そう考えると笑いが混み上がる

瞳は多分歓喜に染まっている
と言った方が正しいだろう

面白い頭脳推理ゲームをしている
と言う感覚に襲われる

多分自分は

この世界の

異端

だからだろう

このゲームに名前を付けるとしたら

なんて付けよう？

どちらにしろ

アユ

と

蘭初めとする

コナンの登場人物

どちらが勝つんでしょうか？

楽しみからか

口角が上がってしまいます〜

駄目ですね〜

しっかり無表情にならないと〜

その時

教室の戸が開く音がした

.

エゴイスト

放課後

入ってきたのは工藤だった

アユは

口角を上げニヤア、

とても

音がするような笑みをした

「ヤッホ」

工藤君やっぱり来たね」

「椎名…お前蘭に何をした？」

「も…椎名じゃなくて
アユって言うてよ」

ケラケラと馬鹿にした様に笑うアユとは正反對に
新一は真剣そのものだ

「とぼけるな」

やんこわい
と思わないから

「…もっやっぱり探偵には
敵わないか
そうだよ
私が蘭を嵌めたの」

「っ！何で…」

「何でって……暇潰し？」

キョトンと当然とでも言うように話すアユに
動揺を隠せず

近くまで近付いていたアユに気付かなかった

馬鹿だね

このくらいで動揺するなんて

隙だらけだよ

「はいこれ対価ね

ボイスレコーダーか

ふふこんなのに気付かないほど馬鹿じゃないよ

新一の手に隠し持っていたボイスレコーダーをひょいと取り上げた

「！しまっ……」

「愚か「ばか」だね

ほんと……みんな愚か「ばか」

刹那

手からボイスレコーダーが落ちていき踏み潰した

バキ

と鈍い音がしてボイスレコーダーが破壊された

馬鹿馬鹿皆馬鹿

アユは笑いが止まらない
ふと止んだと思ったら
また気持ち悪い笑みを浮かべた

「蘭ちゃんを助けない？」

「……は？」

わあゝ間抜け顔

「別に暇潰しだから止めてあげてもいいんだけどな
ま
新一君次第だね」

アユは面白い事思いついちゃった

なのでから

「アユと付き合って」

「っ！？」

「いやだ

俺はお前じゃなくて蘭の事が好きなんだ
お前とは付き合えない
かな～言いたいことは」

あれ～

明白に動揺してるし～
わかりやすっ！

「っ！？」
気付いて…」

「だから～
付き合ってよ～アユと」

「嫌だ」

「むゝ」

聞き分けのない子は嫌いだよ？」

そう言つて

自分の整つた制服を乱していく

自分の首筋にはカッターを当てて

僅かだが血が流れていく

軽く痛いしゝ

まあリアルだからいつかゝ

「さてゝ

若しも

此処でアユが大声を挙げたらゝ

どうなるのか分かるよねゝ」

「つつ！！！」

「もう一回聞くよ？

いま此処で断つてゝ

最低男のレッテルを貼られるのとゝ

いまアユと付き合ってゝ
蘭を諦めるのと
どっちがいいか分かるよねゝ」

だからなんで笑ってるだけなのに
怖がるかなゝ
流石のアユでもキレちゃうぞ
と言いたいなゝ

「っ…………分かった
お前と付き合う」

「よしよしゝ
聞き分けのいい子は好きだよゝ
それじゃあキスしてゝ？」

「なっ…………！？」

蘭を助ける為…………でしょゝ

と話している間に
足音が近付いてくる

工藤君は気付いて無いみたいだけどね

「……………」

段々と工藤の顔が近付き
唇に柔らかい感触が

わぁーお

ちゅーされちゃった
黙れ

「し……………新一？」

「っ！…蘭！！」

ナイスタイミングだね
蘭さん

.

致し方ありませんのに

蘭は

信じられない光景を目にした

新一とアユが
キスをしている所

携帯を教室に忘れたことに気付き
取りにきたらこの光景を目にした

なんで？
なんでキスするの？

「……………っ」

何故か涙が止まらない

「…………っ」

気付いたら走っていた

走って走って

そこから逃げ出したくて
何度もぶつかりそうになった

「蘭……!!」

いつの間にか追いついていた新一に腕を掴まれた

気付いたら

玄関まで来ていた

なんで追い掛けて来たの？
新一も私を嵌めるの？

疑心暗鬼

蘭の心中は

不安で埋もれてしまってた

だから

新一の軽く汗ばんだ手を振り払った

新一はあの子の事が好きだった
私じゃないあの子が

だから

私は

この恋を諦めます

「……らん？」

「……バイバイ新一」

後ろは見なかった

見れなかった

見たら

また

好きになってしまっから……

諦められなくなってしまっから……

「……………」

枯れたはずの涙がまた流れてきた

今日天気予報では降るはずの無い雨が降ってきた

空が泣いていた

.

何故

「あはははは！」

教室の窓から見える

今の光景を見て

私は

嘲るようにして笑った

くだらない

そんなのは所詮

自己満足でしか無いのに

何故わからないのだろう

ほんと皆馬鹿

「ははは……ねえ分かってるから出てきなよ?」

ふと教卓に目を向け話し掛ける

すると安心院亜依が表れた

「やっぱりばれてましたか」

安心院は

ひょこつ

と音がするみたく教卓から頭を出した
ショートカットの柔らかそうな黒髪が窓から入ってきた風に靡く

「今の事話さないよね
安心院ちゃん

だってあなたも毛利蘭が
大っ嫌いなんだから!!」

そう話すとつりぎみの目を少し見開き

こちらを見たがすぐ元の表情にもどった

「はあ……」

まあその通りですけどね
話しませんし

私はこの世界の
一般ピープルの皮を被った

” 異端 ”

ですから

どうこうする気はありませんよ

あなたも転生者なんですよね？」

言っておくけど私は

中二病とかじゃありませんからね

と言います

ニッコリ笑った

その言葉に
こっちが次に驚く番だった

「え……マジでか」

「はいマジですよ
因みに
前世はしがないOLでした
アユさんは？」

「え……と何処にでもいる高校生……」

「そうですか
ならその素晴らしい頭脳とかやらは
特典ってところですかね」

羨ましいです

と言いながら笑う安心院はどこか可愛らしく大人っぽかった

「多分夢小説でいえば
あなたは
最強主みたいなもので
私は
傍観主みたいな位置ですね」

安心院さんて夢小説とか見たんだ
と言うと
さん付けはいいですから
と返された

「まあ
これからの展開楽しみにしていますからね」

「まっかしといて!!
これからもっと面白くなるからね」

なんだか
とても嬉しくなった

理由は多分この話に観客が増えたからだろうと思う

.

其の事が

新一へ別れを告げた

次の日

蘭は学校を休み
部屋で閉じこもっていた

色々考えていて
心が疲れた

「……………新一い……………」

諦めたいのに

なんで

あなたの笑顔が頭から離れないの？

周りに信頼されて

輪の中心にいて

新一の彼女の

椎名さんが羨ましい

なんで

私は

そこにいないのだろう

なんで
…

新一は私じゃなくてあの子を好きになったのだろう

「わかんないよ……」

嫉妬、切望

彼女に対するそんな感情が

ぐちゃぐちゃ混ざって

私の脳内を侵食していく

ホントは諦めたくない

だけど

傷付きたくない自分がある

そんな自分が

大嫌い

「おはよう新一君、元気ー？」

「元氣に見えるか？椎名」

「見える、なんて言ったらどうするの？新一君」

クスクス馬鹿にしたように笑いながら話すアユは
軽く目の赤い新一を見てまた笑みを深くした

「目ー、冷やしたら？」

「触んな」

「相変わらずそっけないのね？」

冗談っぽくいつてにっこり笑う

容姿端麗、という言葉が似合う彼女が笑うと

十人中十人が綺麗

だと言うと思うような笑顔だ

だが新一にとっては違和感がある

と言った方がいいだろうか？

気持ち悪いのだ。

彼女が

「なんで笑ってんだ

気持ち悪いんだよバーロー」

「そー？

酷いなー新一君は」

蘭ちゃんだつたら鼻の下伸ばしてデレデレするんだろーなー、
と馬鹿にしたように話すと
新一は憎しみを込めて睨んだ

だが話は終わらない

「全く蘭ちゃんも可哀相だよねえ
こんな馬鹿に恋して裏切られて

まあどうでもいいんだけどねえ？」

「黙れ」

「うるさいなーお前にはそんな戯れ言云う権利は無いよ新一君
蘭ちゃんをどんな形であれ裏切ったんだ
そんな守る覚悟の小さい馬鹿はどこかの女の尻でも追いかけてろ」

「っ！」

まるで別人の様に話すアユに恐怖感を抱く

「なーんてね、一応付き合ってたから一緒に行こー？」

「……………」

「これは命令だよ？」

「……………何でお前は蘭を苦しめるんだよ」

「え？そりゃあ暇つぶしだって言ってるじゃん？」

下らない質問は止めれば？

そう言っただけだと歩いていった

アユに言われた言葉が頭で繰り返される

新一はどうすればいいのか、
と必死に考えたが答えは見つからなかった

.

理解

少女Aの考察

「やっぱり不思議だな……」

だってそうじゃない？

殆どの人間に好かれて十人中十人が好き、だなんて夢物語でも有り得ないから。

なのに、椎名愛遊は殆どの人間に好かれて勉強、運動はこの学校に上位にいる。

しかも誰にでも優しいいい子だから周りに人が集まる。

なんだか完璧過ぎて気持ち悪い。

人なんだから、欠点とかあると思う。

なのに、あの子の欠点という欠点は見つからない。隠しているのかな？

このことを数少ない友人の安心院ちゃんに話したら、同意してくれた。

けど、怖い顔して愛遊さんに気持ち悪いと言っちゃ駄目だよ。なんて返されちゃった。

そつだよね。傷付けるつもりじゃないのに傷付けちゃったら嫌だからね。

もしも椎名さんに言っちゃったらなんかされそつだし。

虐められてる毛利さんは多分、椎名さんに嵌められちゃったんだと思う。

だから、周りから嫌われてたのに更に嫌われちゃったしな。ご愁傷様。

そついえば毛利さんが嫌われる原因はやっぱり工藤君なのかな？

毛利さんは素敵な可愛い普通の女の子なのに。

「どつしたの？」

「ううん、なんでもないよ」

まあ、別に

私には関係の無い事か。

移動教室だから急いで行かないと。

あ、そついえば、今日毛利さん今日休みだったな。工藤君は目が少し赤かったし。

あと椎名さんイライラしてたな。ストレス溜まってるか女の子の日なのかな。

駄目だよ、イライラしてたら肌が荒れちゃうよ。

周りは気付いてないみたい。普通気付くよね？
椎名さんのお友達ここに反吐が出そう。我慢我慢。

「急がなきゃ遅れるよ？」

「うん、」

ああ、そうだった。急がないと。
私と安心院さんは急いで教室に向かった。

出来ないのか

「鈴木園子さーん？ちよつといい？」

「…何よ」

あは、睨まれちゃった

だけど、園子に睨まれる筋合いは無いんだけどなー。蘭に睨まれる筋合いはあるけどー。

あ、そういえば、なんで呼んだんだっけ？あ、そうそう。

「園子さんに頼みたいことあったんだー」

「名前で呼ばないでくれる？
不愉快なんだけど」

「あは、ごめーん！鈴木さーん
ちよつとお願い聞いてくれるー？」

「嫌よ」

あは、速答！

いくらなんでも傷ついちゃうぞ
てへぺろ…うわ気持ち悪！

「……ふーん、蘭ちゃんがどうなってもいいんだ？

鈴木さんって友達を見捨てる様な奴だったんだねー？サイテー」

「っ！

……頼み事って何？」

おーおー、理解が早くて助かるわー。ある意味蘭より園子の方が頭良いかもね。

だけどなー、やってくれるかな？

ま、友達思いの優しい優しい園子ちゃんだったらやってくれるよね？

「それはねー、蘭ちゃんをカッターで傷付けて欲しいんだー。

あ、勿論顔以外の場所だね！

傷はー……」

「ふざけないでよ！

そんな事できるはずないでしょ！蘭は大事な親友よ？

バツカじゃない！？」

うわ、超顔真っ赤なんだけどー。ウケるー。てゆーか、人の話は最後まで聞こうよー。

「あー、五月蠅いなー。

そんなにやりたくないならやらなくていいよー。

大事なお友達の蘭ちゃんは今アユがぐちゃぐちゃに原形が無くなるくらいに刺して息の根を止めてあげるからー。」

なんつって。嘘だけー

うわ、血の気が引いてくみたいに顔真っ青ー！

あれ、てか涙目じゃね？わー、鈴木さん虐めちゃったー。

「やるからーやるから蘭には手を出さないで！お願い！」

「えー？どうしよっかな？」

急に意見を変える子は信用出来ないしさー。

あ、良いこと思いついた！

園子、土下座して

『お願いします、椎名様。私にやらせてください。喜んでやらせていただきます。』って言ったら蘭ちゃんには私からは手を出さないであげるよ。」

ま、さすがにプライドの高い鈴木お嬢様が土下座なんかするはず無いけど？

って、思っていたけど、土下座したよこの子！どれだけ蘭が好きなさ。馬鹿じゃん。

「お……『お願いします、椎名様。私に、やらせてください。喜んでやらせて、いただきます。』」

言い終わると同時にぴろりん　なんて場違いな音が響く。
誰が鳴らしたって？

はいはい、アユちゃんです！

丁度ケータイでムービー撮ってたからね！

あは、園子顔真っ赤！ウケる！

私はポケットに入れていた可愛らしいデザインのピンク色のカッターを取り出し、刃をキチキチ、と音を鳴らしながら長く出していく。

これ、お気に入りの奴なんだけどなー。

結構可愛いんだよね。赤地に白の水玉のリボンが付いてて。

顔を上げている園子の喉に刃をピタリ、と当て、私はニッコリ笑う。

園子は恐怖感からか、震えた喉に軽く刃が当たり血がながれる。

「もし、失敗したら、アユが蘭ちゃんを殺しちゃうかもしれないよだから、失敗はダメだよ？

そーのこちゃん？」

ひゅ、と声が出ずに空気が口から漏れる音がする。

「あはっ、間抜けな顔しちゃって？」

やるのは明日の放課後、四時半に教室ね？

あ、このカッター使っていいよ？

それと、手加減とかしてたら、分かるよね？

じゃあね。友達大好き園子ちゃん？」そのあと、アユが居なくなつた後の廊下では嗚咽の音が静かに響いた。

「蘭…蘭……」

園子は、噎び泣くように大好きな親友の名前を呼んだ。

ふと、涙で歪んだ景色の中、

二人の男女が見えた。

一人は、先程まで此処に居た、椎名愛遊。

もう一人の人物の顔が見えたとき、絶句した。

なんで工藤君が、椎名と居るの？

園子はぐるぐるしている脳内を整理しようとしても、さらにぐちゃぐちゃになる感覚に陥った。

悲しくて（前書き）

あてんしょんぷりーず。

今回の話には死体の表現やらがちよつと飛び交いますので
苦手な方はバックぷりーず。をお願いします。

悲しくて

蘭が暗い顔をして、教室の前に立つ。深呼吸をして中に入ると、教室が一気に静かになった。

と、同時に嫌悪、嘲笑の瞳を向けられる。蘭はただただ黙って、花が置かれている自分の席まで行った。

机には鉛筆で書かれた大量の悪口やらの言葉の羅列。消していると机の中からカサ、と音がした。

「……？」

何気なしに机の中に手を入れると、指に鋭い痛みが走る。何が入っているのか、と中を見て悲鳴を上げ、尻餅をついた。

鼠か、何かの小動物に深々とナイフが刺さっていた死体が入っていた。

余りのショックに涙がこぼれる

「うわ、気持ち悪。
てか、汚い。」

「臭ーい」

「さっさとかたづけてよ」

クスクスと笑いながらこの光景を見ているクラスメイト。だが、蘭はシヨックで腰を抜かしてしまっただけ動けない。クラスメイトの一人、小碕千歳が、蘭に舌打ちをして近づいた。

「さっさとかたづけてよ？ ブス！」

それとも、仲間の死体なのに片付けられないの？」

ガンツと机を蹴った拍子に中の死体がずるり、と蘭のスカートに落ちてきた。ベチャツと生々しい音が響く。周りの人は異臭に眉を潜めた。

「ちょっとー臭いんだけど。」

あー！ そうだ髪洗ってあげましょうか？ ねえ、……」

小碕は隣にいた友人、三笠律にヒソヒソと何か言っや、顔に花瓶に入っていた花ごとぶっつけた。

「草の臭いがしていいんじゃない？」

にやにやしながら見ている彼女、小碕の隣に先ほどの友人、三笠がきた。

手には汚いトイレにあるモップ。

それをあろうことが、蘭の頭に擦りつけた。ゴシゴシ、と力強く押し付けて、笑いながら言った。

「あんたみたいなブスがアユちゃんを虐めるとか、百年早いんだよ。いつとくけど、アユちゃんの受けた痛みはこんなもんじゃないから」

「わたしは椎名さんを虐めてない！
信じ……んぐう！」

「汚い口で話すなよ。
歯ブラシもしてあげるー」

口にモップを押し付けられる。余りの異臭に吐き気が込み上げてくる。

すると、ふ、と顔にあった物が取り払われた。目の前にはモップを取り上げた新一。

「く………工藤君」

「なにしてんだよてめえ等！」

「っ！………工藤君酷いよ！」

律達工藤君とアユちゃんの為にしたんだよ？」

「何言って………」

「蘭ちゃん大丈夫？」

「これはどういうこと？」

椎名愛遊も現れ、二人は軽く不安の色が現れながら、アユの元へと歩いた。

「ア…アユちゃん！これはね、アユちゃんと工藤君の為にしたことなの！」

「ん？いーよ。ありがとうー。」

とりあえず蘭連れてくね保健室に」

「アユちゃんの制服汚れちゃう！」

「大丈夫だよー」

そのあとアユは蘭を引きずる様にして歩いていった。そして着いたのは誰も使わなくなったトイレ。前もって用意していたのか、バシヤ、と水をぶっかけた。

「うわ、ウケる。」

写メっちゃうから、はい、ピース」

べぽ、なんて間の抜けた音と共に携帯画面に蘭が映った。

仕方ありません

アユと蘭が居なくなつた後、園子は屋上近くの階段に居た。
見ていられなかったのだ、蘭を。

これ以上蘭が傷付くところなんて見たくもない！

そう思いながら顔を膝に埋める

カシャン、と音がして、何かが落ちた。身体をびくり、と強張らせ、それを見ると可愛らしい装飾をした、カッター。

見た途端、首に鈍い痛みが走る。

椎名愛遊に恐怖感、嫌悪感が、園子の感情を支配する。

それと同時に、自分の無力さに腹が立つ。

カッターをしまいまた、顔を埋めていると、スカートの中にある携帯が震えた。

カチカチ、と当たる音にいらしながら携帯を開けると驚愕した。

「蘭っ……………！」

そこにはボロボロになった蘭の姿。

メールには、不釣り合いな可愛らしいデコメで飾られた文章が書いてあった。

可愛い蘭の写メあげちゃう！

因みにここはある校舎のトイレだよん（＾Ｏ＾）

分かるかな？

早く見つけなきゃ駄目だよ？

また、蘭ちゃんがボロボロになるのを見るのも楽しいけどね！！Ｏ

（　　）Ｏ

園子ちゃん、ファイト

園子は血相を変え、階段を降りて行った。目は赤く充血し、怒りが籠っているのが分かる

「椎名……………椎名椎名椎名椎名椎名椎名椎名椎名！！」

あの女……………絶対に許さない！

調子に乗るのもいい加減にしなさいよ！！」

「誰が調子に乗ってるって？
うざったいんだけどー。」

園子は脚を止め、横を見ると、椎名愛遊。踊り場で携帯を力チ力チといじりながら、気怠そうに欠伸をした。

園子はそんなアユとは反対に顔を真っ赤にして、睨んでいる。

「……………椎名あ！

あんたでしょ！このメール送ったの！

蘭を何処へやったのよ！言え！」

「うつぜ……何の事ー？勘違い乙。

気違い女の蘭ちゃんの事なんかアユ知らないー」

「ふざけないで！あんたしか居ないのよ！」

「だから知らねーって言っただよ。

てか、気違いは普通助けないのが当たり前じゃねー？
ばっかじゃん。

今頃蘭ちゃん可笑しくなってるんじゃないかなー？

あははは！考えたら見なくなっちゃったー！ヤバいウケるんですけどー園子ちゃんさー、今日頑張っただねー？しくじったら殺しちゃうから？」

園子はそう言われた途端、頭が真っ白になった。

そして、彼女に込み上げる物は本能的な恐怖。

この女は本気だ。本気で蘭を殺す気だ。

園子は無意識に笑っているアユをドン、と突き落とした。アユは、笑顔で落ちていった。

園子がハッとした時にはアユの姿が消えていた。ドササ！と下で音がしたので、手すりから下を見ると、アユは新一が支えていた。

「い……たいよ。新一い……」

アユは先程迄の真逆の表情をしながら涙を流していた。多分、これは演技だ。

段々と人が集まってくる。園子は怖くなってきて、その場から離れ

た。

本当に私がやったの？

怖い怖い怖い怖い！

園子はガチガチと歯を震わせながら誰も来ない屋上まで走ってきた。

また、携帯が鳴った。園子は震える手で携帯を開くと、先程とは違う、知らないアドレス。

今日しくじんなよ？

しくじったら大事な大事な親友の蘭を殺すからね？

あ、アユは優しいから園子ちゃんの事は話してないけど、失敗すればうっかりはなしちゃうかもー！

園子は涙がぼろぼろ止まらない。

誰か、誰か、自分を守る為に親友を傷つけようとしている私を止めて下さい。

そう思うのは

「ごめんね園子！遅くなって」

蘭は園子に頼まれ、放課後に教室に来るように言われたのだ。蘭は、笑顔で園子に駆け寄るが、園子の様子がおかしい。

「……………園子？」

「……………蘭はさ、私の事親友だ、て言ってくれたよね。今も、そう思ってる？」

「勿論！どうかしたの？」

「な……………なんでもない」

園子は後ろに隠しもってるカッターをチキ、チキと刃を出していく。蘭はそれに気付かず、不思議そうに園子を見ている。

「園子？」

「蘭……………ごめんなさい……………」

「え？」

園子はぎゅっと目を瞑り、カッターを蘭に突き刺した。つもりだった。

しかし、カラン、と音がして、カッターの刃が真っ二つに折れた。蘭が、咄嗟に折ったのだ。

ああ、失敗してしまったかどうかどうしようどうしようどうしようどうしようどうしよう蘭が死んじゃう死んじゃう死んじゃう死んじゃう死んじゃう死んじゃう死んじゃうそんな、私のせいで、

園子は混乱していると、急に携帯が鳴った。

園子はびくり、と身体を震わせて携帯に耳を近付けた。

『役立つ。あのカッター気に入ってたのに』

園子はアユの声を聞いたとたん、周りを見ると、向かいの校舎の窓から無表情でアユが見ていた。

園子はその場から崩れ落ちて、嗚咽を漏らした。

「ごめんなさい、ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

蘭は園子に傷付けられたショックで呆然としていた。

アユは机の上に座って足を組んでいた。枝毛チェックをしながら泣いている園子の方を見ていた。

その瞳には何の感情も籠っていない。

「ほんと、園子ちゃんてば役立つんだからー」

「でもかわいいですよね」

「うばぁ!」

軽くひっくり返りそうになるくらいにびっくりした。そんなアユを見ながらまた安心院はココアを一口飲んだ。

「ちなみに始めから居ましたよ」

「心臓が凄くバクバクしてるんだけど」

「それはそれはご愁傷様です」

いやご愁傷様じゃねーしと思いながらも気持ちを落ち着かせる。安心院はアユにコーヒーを差し出して、また傍観を始めた。

「まったくアユさんてば、えげつないですよね」

「褒め言葉をありがとう」

「いえいえ本当の事ですから」

また、アユ達は傍観を始めた。
園子はまだポロポロと涙を流していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7156w/>

要するに、世界は

2012年1月10日23時46分発行